

# 医院だより

令和 6 年 7 月 (252)

秋 山 医 院

藤岡市小林748-8

☎0274-22-8315



たちあおい

**七月** 別名 文月（ふみづき、ふづき）、

建申月（けんしんげつ）、孟秋（もうしゅう）

文月は「穂含月（ほふみづき）」「含月（ふくみづき）」が語源ではないかと考えられています。稲穂がその実を膨らませる月という意味でしょう。一方、文披月の略で、七夕のために貸す文を披く、ところから出たという説（講談社日本大歳時記）もある。

（河出書房新社、鈴木光弘著「暮らして生かす旧暦ノート」より一部引用）

## 目次

- 1 七月の異称、七月の花、七月の言葉
- 2 七月の暦、
- 3 お知らせ、当番医、健康テレフォン
- 4 日野原重明先生の言葉、大岡 信選集
- 5 けんこう(百七十五)  
**群馬県感染症発生動向調査より**
- 6 院長のひとりごと(二二二)

「七月の花」合歡木（ねむのき）、百日紅（きさすべり）、木槿（むくげ）、

睡蓮（すいれん）、蓮（はす）、野花苘蒲（のはなしょうぶ）、擬宝珠（ぎぼうし）、振り花（ねじりばな）、紅花（べにばな）…これの古名が源氏物語に出てくる「末摘花」、透百合（すかしゆり）、ニッコウキスゲ、鹿子百合（かのこゆり）、黒百合、乳母百合（うばゆり）、

## 『七月の言葉』

まことに彼は我々の病を負い、我々の悲しみをになつた。しかるに、我々は思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのたがのために傷つけられ、我々の不義のために碎かれたのだ。彼はみずから懲らしめを受けて、われ

われに平安を与え、その打たれた傷によって、我々はいやされたのだ。(イザヤ書五三・四一五)

もつとも偉大なる事は、人に勝つことにあらず、人に彼にわが場所を譲ることなり。その下に立つ事なり。喜んでその侮辱を受くる事なり。唾せられて十字架につけらるることなり。かくなし、かくなされて、われは初めて神の心を知るを得るなり。まことに高きものは低くせられ、低きものは高くせらる。

われら、神に高くせられんと欲すれば、人に低くせられざるべからざるなり。

(内村鑑三「続一日一生」六月二十五日)



### 「七月の暦」

一日 半夏生、全国安全週間、国民安全の日、富士山開き

四日 米国独立記念日

五日 栄西禅師忌

六日 小暑 梅雨が明けて本格的に

夏になるころのこと。この小暑から立

秋になるまでが、暑中見舞いの時期です。

初候 温風至る

夏の風が、熱気を運んでくるころ梅雨明け

けごろに吹く風を白南風(しろはえ)と呼ぶとのこと。

(新暦ではおよそ七月七日～十一日ごろ)

次候 蓮始めて開く

蓮の花が咲き始めるころ。夜明けとともに、水面に花を咲かせます。

(新暦ではおよそ七月十二日～十六日ごろ)

末候 鷹乃学を習う

鷹のひなが、飛び方をおぼえるころ。

巣立ちし、獲物を捕らえ、一人前になつていきます。

(新暦では、およそ七月十七日～二十一日ごろ)

七日 七夕

九日 東京浅草観音はおおずき市

十五日 海の日

二十二日 大暑 最も暑い真夏のころのこと。

土用のウナギ、風鈴、花火と風物詩が目白押し。

初候 桐始めて花を結ぶ

桐が梢高く、実を結びはじめるころ。和の暮らしの中で、桐は家具として役立ちました。

(新暦ではおよそ七月二十二日～二十七日ごろ)

次候 土潤いてうるおいて溽(む)し暑し

むわっとする熱気がまとわりつく蒸し暑いころ。打ち水や夕涼みなど暑さをしのぐひとときを。

(新暦ではおよそ七月二十八日～八月一日ごろ)

末候 大雨時行る(たいうときどきぎんぷる)

夏の雨が時に激しく降るころ。むくむくと青空に広がる入道雲が夕立に

(新暦ではおよそ八月二日～六日ごろ)



## お知らせ

一、マイナンバーカードでの受付ができません。保険証の代わりになります。将来的には他院での処方や特定検査結果もここから知ることができます。

まだマイナンバーカードがない方は、月の最初の受診時には、**受付に保険証**をご提示ください。

## 二、診療案内

七月から従来通り、午後の診療を再開します。

『午前診療』はこれまで通り、  
(月)から(金)、8時半～12時半  
来院順で診察を致します。

『午後診療』は予約診療と一般診療で行います。

- (1)月、火、水、金曜日、15時～18時
- (2)午後の診療では1時間に2人の予約枠(1日6人まで)を設けました。時間間に制限のある方はご利用ください。
- (3)診察の順は、予約の方優先と致します。予約外の方は来院順です。
- (4)予約の無い方の受診受付は5時半までといたします。

## 『診療内容』

- 一般外来診療
- 往診・在宅医療
- 骨粗鬆症の検査・治療
- ピロリ菌の検査と治療
- CT、MRI、PETの予約
- 胃カメラ・大腸カメラ・エコー
- 肺炎球菌・带状疱疹ワクチン
- 他のワクチン(新型コロナウイルス、RSワクチン、インフルエンザワクチン)

## 三、当番医八月十一日(日)

9時から18時まで

## 四、八月十二日から十五日は休診



## 五、群馬県保険医協会二十四時間健康テレホン

電話〇二七―一三四―四九七〇

<http://www.raijin.com/kenko/>

月	胸のいたみ
火	電動歯ブラシ
水	痛風
木	更年期と鬱(うつ)
金	放射線とは何ですか?
土日	口呼吸 vs 鼻呼吸

## 「日野原重明先生の言葉」

「なかなか人と打ち解けられず、いつもどこかぎびしい気持ちでいます」  
年齢や経験を重ねると、どうしても周りの人から敬遠されたり、話しかけづらいなと思われたりすることはあります。自分の若い時を振り返ってみても、経験

不足もあって、なかなか目上の人と打ち解けられないという経験はありました。

僕なんて105歳ですから、ほとんどの人が年下になってしまいます。特に舞台上がって講演をするときなども、上からものを言っているように受け取られないように気をつけているのです。

あなたにもお勧めしたいのは、ユーモア、つまり笑いの効能です。

なぜなら、一緒に笑うということは、何より人と人の一体感を深めてくれるものだと思うからです。

ユーモアで思い出すのは、よど号ハイジャック事件のことです。4日間の拘束を経て、さあこれからやっとなんか解放されること分かったときです。

長い緊張状態が解けて安心したのでしよう、乗客の一人が「ところでハイジャックって何ですか？」と犯人に尋ねたのです。この事件は、犯人の「我々はこの飛行機をハイジャックした」という言葉から始まったからです。なにせ日本で初めてのハイジャック事件でしたから、乗客のだれもが、ハイジャックという言葉その時初めて耳にしたに違いありません。

ところが犯人もその質問にうまく答えられなかった。そこで、僕が犯人に「ハイジャック犯人がハイジャックを知らないとはいかがなものか」と言ったら、機内中が大笑い、犯人も乗客も一緒に笑ったのです。

その瞬間というのは、なんだか一種独特な柔らかい空気に包まれました。その後飛行機を降りるときに、犯人に向かって「これから頑張れよ」と声をかけた人もいたくらいです。

そんな経験から、どんなときにもユーモアは必要で、一緒に笑い合うというのは、心と心の壁をとる、一体感を生んでくれるものだ実感したのです。

いつも笑い声に溢れた私たちでありたいものですね。

日野原重明「生きていくあなたへ」

大岡 信著 『新折々のうた』七 から

逃げしやな水祝はるる五十婿 小林一茶

『七番日記』所収。「水祝い」とは江戸時代にあった正月の風習で、前の年結婚した男のもとに行き、水を浴びせる。一茶は五十二歳で故郷信州柏原近辺の女性と結婚した。まさに「五十婿」。警戒していたのに水で祝われてしまった。そんな自分を、戯画

化して詠んでいる。旧正月は今の二月半ばだから、さぞ寒かったことだろう。この風習には百年ほどの享保年間に幕府の禁令が出ていたが、相変わらず続いていたらしい。

人呼ぶと妻が名呼べり幾度を

かかる過ちするらむ我れは

久保田空穂

「土を眺めて」(大七)所収。上記歌集は、大正六(一九一七)年四月に臨月の身で子癩のため急死した愛妻藤野の追悼歌集。妻の死後茫然自失、ほとんど一年間歌も作れず過ごしていた空穂が、突然に、三か月ほどで堰を切ったように次々と作った挽歌群である。特筆されるのは、近代歌人中、長歌の作者としては質量ともに抜群(百四十一首)だった空穂の、最初の長歌群が「土を眺めて」にあったこと。同時に右のような短歌もあった。



# けんこう (百七十五)

## 群馬県感染症発生動向調査より(25週)

(群馬県衛生環境研究所感染制御センター)

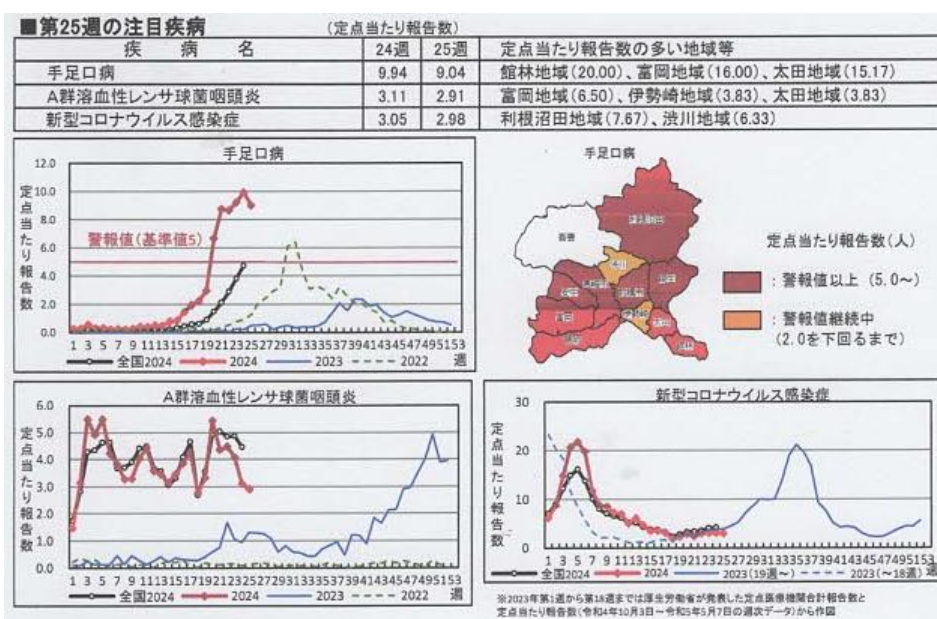
★手足口病の報告が継続しており、県内では警報が発令中です。

原因となるウイルスはアルコールが効きにくいので、手指は石けんと流水でよく洗うようにしましょう。

★A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が一部の地域で多く報告されています。

咳やくしゃみのしぶきに含まれる菌を吸い込んだり汚染された手で、口や鼻を触ることにより感染します。

石けんと流水を使った手洗いを行いましょう。



ハルシヤギク



マツバギク

### 湯桶の水

◇奈良、伊賀上野、高野山、大阪・：時代が  
かったことが好みの新郎の気持ちを忖度  
して家内が計画した旅行プランである。

「伊賀上野鍵屋の辻」と言っても今では  
「は？」

とでも分かってくれる人は百人に一人も  
いないかもしれない。

それはさておき。

◆高野山は、祖父が二十三歳の長男を日露  
戦争で亡くしたとき永代供養をしてもら  
っていると聞いたことがあったので一度は  
行っておきたいと思っていたところ。

父はこの長兄の死後、ちょうど一年後に  
生まれ、戦死した兄が生まれ変わって帰  
ってきたと喜ばれた。私はその父の6番  
目の末っ子だからまさかこんな甥が訪ね  
てくるなんて、戦死した伯父には夢にも  
思いはしなかったことだろう。

◇宿泊は「宿坊 何某」で全国各地のお寺の  
子弟が住み込みで精進料理を作り、お世  
話をし、朝も準備が終わると「高校」に

出かけていく。青く剃った頭がなんともすが  
すがしかった。

散策すると、有名な武将のお墓が、同所に  
立ち並び、敵と味方のいさかきもない聖地で  
悠久の世界に眠っていた。

◆一番記憶に残ったのが、洗面所でちょぼちょ  
ぼと水道栓から木桶に汲み貯めた水で顔を  
洗ったことであつた。じゃーじゃー流れる水  
を手を受けて顔を洗うより水が無駄になら  
ないので、これはいいなと思つたわけである。

◇旅を終えて家にあいさつに行つたとき、私は  
早速、得意になって父に洗面のときの木桶の  
話をすると、父は

「いや、かつて自分もそう思つて調べたことが  
あるが、桶にためた水より、その都度手に受  
けて洗う水の量のほうが少なかつた」  
といつた。

不思議なことに、実の父親に

「自分と同じことを考えていたこの人は懐か  
しい人だなあ、信用できる人だな」  
と妙な信頼感を持つた。

◆その後顔を洗うたびにこのことを思いだす  
が、30回以上も顔を洗うことでもしなけ  
れば、汲んでおく水量よりその都度流水で

洗う水量のほうが少ないことを確認しては  
納得している。

◇父の生家はその地域では少し大きい農家で、  
田畑と山林を所有していた。米を売って生活  
するわけだから、収穫は一年に一回きりで、  
入ったお金で一年のやりくりをするので「儉  
約」が中心経済観念であつた。臨時に金が必  
要になると、山林の木を伐採してそれに当て  
ていた。中には酒に換えている代もあつたと  
いう。

◆母の長兄が東京で医学を学び越後湯沢で何  
代目の病院を継いでいたので、

「江戸っ子は宵越しの銭は持たねえ」

などと粋がつていた実家から嫁いできた母  
は、お金の使い方の違いに驚いたに違いない。

◇父がものごとの決定を躊躇していると、

「こうやりましたよ、ああやりましたよ」  
と弁破をかけたリ、

『済んでしまったことは後でよくよしたつ  
て仕方がない』

と気風のいいことは言っていたから、それに  
押されて父が決心することが多かつたが、母  
も自分自身のことになると意外にくよくよ  
するところが多かつた。

◆7 そのような家庭であったから、洗面の水に

関しても、父は水を無駄に流して使うよりは「桶」に少量ためてその中でちびちびと顔を洗うほうに賛成すると思っていたので、父が逆の返答をしたので、私は少なからず驚きかつ、それをいちいち試みて確かめたことに感心したものであった。

◇跡継ぎの長男を戦死で失った祖父は、親戚の家に預けていた次男を家に戻し、わたしの父には

「これからは教育が必要だ」

と言って学校に進ませた。しかし、家に入った父の次兄に子供がいなかったため、日本の敗戦後、父は次兄の養子として生家にもどることになった。農地解放、山林解放と戦後の波にもまれて、ほとんどを失ったが、父が教師になっていたので乗り越えられたのであった。

母は人の見方を子供たちに教えた。

父は何も言わず、黙々として、時に柱に寄りかかって焦点の合わない目をしていて姿を何回か見た。

◆一緒に田植えをしていた時に

「自分にも言いたいことはいっぱいあるがしゃべらないだけなんだ」

と中学生の自分に無念の思いを一言だ

け話したので驚いたことがあり、なぜ私にそんなことを話すのか、と不思議であった。

◇それほど気持ちを表に出さない人だったが、私が高校生のころだったか、二人で家の裏で仕事をしていた時のこと、青大将が出てきて驚いた。父は杖でその頭をコツンとたたいた。ちよつと脳震盪でも起こしたのか蛇が動かなくなつた。父は巳年生まれであつたが、蛇とハチは心の芯から嫌いであつた。持っていた棒に蛇をひっかけて拾い上げ、体をひねりながら、ええいとばかりに空高く放り投げた。

蛇にとつては納得いかないことではあつたが、何か鬱憤を晴らしたように父の顔は晴れ晴れ、年来の大人のいじめっ子の家の庭にでも落ちたか？ いまでは確かめるすべもない。

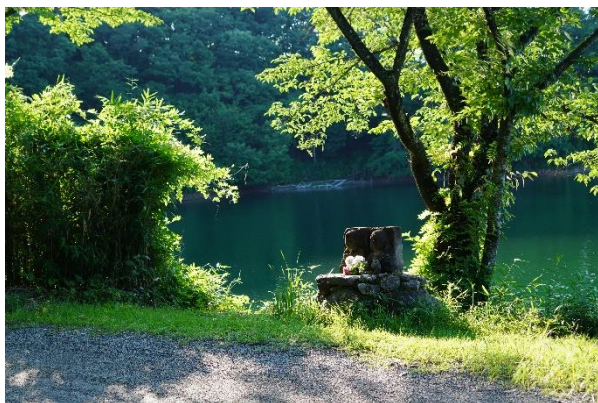
おそらく母も見ることがないほどですが、がしい父の顔を惜しげもなく私に見せてくれた。

◇『桶』の大小や、水道から出る水の勢いのあるなしで話は別になるが、父がどちらが水を無駄にしないかと確かめたことが父らしく、うれしかった。

私は水道の水のほうが無駄になる分が

多いから、不経済ではないかと感覚的にただそう思っていただけであつた。

竹沼の地蔵様



◆父も末っ子、私も末っ子。

終戦で生家も揺らぎ、父は苦勞した。平成になり、私たち兄弟も六人のうち4人いた男子も家を離れて生活を立て今は私のほかは長岡に住む兄とで二人になつた。

◇雪深い生家に老いた姉が一人で頑張っていたが、歩くこともままならなくなつた



め、2年前から姉を施設にお願いし、旧家の整理を自分ができることになってしまった。実家まで行き来が多くなることを考え、2年間午後の外来を減らして生家と姉の施設への往來を繰り返してきた。

◇草創の苦勞は計り知れないが、「後始末」の大變さは父と二代をかけて半々で、ほかの兄弟にこの苦勞はさせたくないと思ひ、次兄を相談役にして少しずつ平穩、安らかで豊かな土に戻そうとしている。

◆次兄は父の長兄の名の一字『邦』をもらっている。本来はこの伯父が家を継ぐはずだったのだ。

